

大学の變革

永井道雄

建学の精神

同志社という学校がどういふ良い学校かということについて、私は父の永井柳太郎から非常によく聞いております。明治十年代にこの学校が出来た時には、新島先生がその中心にありました。当時、日本に三つ自由主義的の立場をとる有名な私立学校が出来たわけですが、あとの二つは大隈重信の早稲田、福沢諭吉の慶応でありました。それぞれの学校に特色がありましたけれども、今の三人のリーダーについて考えますと、世界的、國際的に見ましても、十分に他國にその存在を誇り得る人々であったことはまちがいないことであります。学校にそれぞれ特色があり、早稲田は自由民権運動の立場から、在野の議會政治家とか、ジャーナリスト、そういう人たちを養成することを目標にいたしました。慶応の場合には、福沢先生は日本に自由な經濟の發達を起すことの必要性を感じておられました。そこで福沢先生は自ら着流しの姿で前掛けをかけて学校に来られた。当時、学校の先生に対して月謝を払うというとは何となく

失礼なことで、お金を払う時には、御布施のように、わからないようにして束脩という姿でお金をだした。そういうことは恥ずべきことであつて、自分は諸君から月謝を取る。幾ら幾らの契約で教えようということでお金のこと、学生諸君と正面から話しあつた。そういうまことに徳の高い人物でありました。そういうことを話すことが徳の高いことであるという確信を持つていた日本人がいたということとは重要なことであります。

同志社はそういう二つの学校に対して「一國の良心を養成することをもつてその目的とする」といふ建学の精神をもつて生まれました。これが京都の裏にできたということに非常に深い意味があります。要するに東京に政府があつて、上からの指導が行なわれ、早稲田や慶応に在野の經濟人やジャーナリスト、議員、政治家が生まれる。しかしそういういわゆる在野の政治活動とか、あるいはまた經濟活動というものでおおうことができない、非常に重要な文明の中核というものは、人間の良心である。それを作るのが同志

本文はさる6月14日、大学アッセンブリー・アワーで講演されたものを、収録編集したものです。 編集部

社であるということをお島先生は考えられたわけでありませう。やや遅れて神戸の原田の森に、この近辺で生まれた吉岡美国先生を中心に、西洋人の協力を得て生まれた関西学院もまた同じような目的を持って重要な人材を輩出したました。

さきほどの御紹介に私の父が中途退学したということがあったのですが、それは事実であります。というのは、中学時代私の父は、ここでストライキをいたしました。そこで新島精神が何であるかについて学校側と争いました。陳謝すれば学校に残してくれるということであったわけですが、私の父は新島先生の教えを守って陳謝しなかつた。その結果退学になりました。しかし当時の中学部の主任は安部磯雄先生でした。日本のキリスト教の歴史、あるいは社会主義の運動の歴史に燦と輝く偉大な人物であったわけですが、安部先生は私の父の教育に非常に興味をもたれた。というよりは、絶対に陳謝をしないで学校をやめて行く学生を愛された。そして関西学院という、いわば姉妹校のような学校に送って、そこで私の父を育てて下さったわけでありませう。

新島先生の偉大さについて皆さんはいろいろなことを聞いたでしょう。私は父の言葉を通していろいろなことを聞き、今日、私が大学の教師として仕事をしながら、実に大学の教師にふさわしくないことを恥じるわけでありませう。新島先生は、たとえば学生をせめるというようなことをなさつたことはいないのです。学生が騒いだり、わけのわからないことを言つたり、そういうことをするのは今日もそうでありませうが、昔もそうであつたでしょう。その時に新島先生は毎日礼拝堂に入つて、一人一人の学生の名前をあげて祈つたので

す。それほど一人一人の学生について先生は知っておられた。彼はこういう癖がある。ああいう癖がある。その家庭はこうだ。希望はこうである。彼が本当に發展するということに神が力を与えてくれることを自分はその教師として願う。深夜、礼拝堂の前を通つて新島先生が誰にも知れずにそういうことをやっていることを知つた学生の中に、愕然として、新島先生に教えを乞はつた人が生れた、ということも伝えられているのです。また、新島先生は学校に騒ぎがあつた時に、自らの杖をもって学生でなく、自分の体を打たれたということも伝えられています。

大学のマンモス化

それはかつての同志社であります。それはかつての早稲田です。そしてまた、かつての慶応であるわけです。現在の同志社にも、立派な学生諸君、それから立派な先生がおいでになることを私は疑いませんが、しかし、大学としての同志社は、ほとんど破産したといつてもよいでしょう。つまり、一体、ここでどういふふうな教育が、どんな姿で行なわれ、またここからどんな研究が生まれてくるかといふことについて、恐らく不安をもたない学生諸君がいるとしたら、その人は学生としての資格を欠いている、と私は考えませう。しかし、その問題は同志社に限らないのです。現在、慶応に三万以上の学生がいる。慶応を卒業した偉大な先輩の一人であつた大養木堂という人が、当時一万人程度の学生がいたその母校に帰つて「学校の名前は「慶応義塾」と言つたと言えられています。学校の名前は「慶応義塾」と。そうすると大養は笑つて「塾というのは小さな家で先生と学生が膝をつき合せて勉強する所だ。またその

名前か」というと、当時の慶応の先生たちが「そうだ」と答えました。看板に偽りあり。私は今同じ事を皆さんに言うことができますでしょう。これは志を同じくする人間の結社であります。それがあなた方の学校であります。いったい、あなた方は、いま志を同じくして結果して何をしようとしているのか。それとも志を同じくする等ということを考えてもいいのか。それともそれが出来ないために不安をおぼえているのか。その事をまず考えて頂きたいのです。

早稲田も同じように、都の西北、早稲田の森に、学の独立を目ざして生まれました。昨年は約半カ年にわたって閉校いたしました。昔の早稲田というものはいま早稲田にないのです。それらはすべて私立大学の問題でありましょう。それでは国立大学というものは、そんなに立派なものであるか。私は京都大学の教師をしていました。現在、東京工業大学の教師をしているのです。そして今まで幾度か西洋の大学で学び、また教えたことがあります。そして私は、日本の国立大学の教師として自分の学校に帰って来た時に、非常な不安をおぼえるのであります。私は、大学院の学生を教えるのでなく、好んで一般教養の教師になりました。なぜかならば、一般教養というものは大学の心臓であつて、大学の教師たらんとするならば、大学院で教えるよりは一般教養を教える方が面白いからです。そこで東京工業大学で私は一般教養を教えています。が、うまく行きませぬ。だんだんサイズも大きくなるし、学生との対話というものも少ないし、学生に本を読んでもらつて、ディスカッションをしようと思つても図書館の設備や運営というものがさういうふうに来ていないのです。東京工業大学は沢山のエンジニアや科学者を作ります。

その人たちがビルを作つたり、道路を作つたり、あるいは外国に輸出する機械を作つたりする。しかし誰でも知っているように、今日の日本の社会において、一体さういふ道路とかあるいは科学とか技術というものが、本当に人間に幸いをもたらずものであるか。それとも、ただいたずらに社会を狂奔させて、人々に不安と混乱を与えるのみか、について考えなければならぬ問題があるのです。

自治の現状と問題点

そこで私は八年前から、東京工業大学に社会工学科を作ることを中心とした。その卒業生はこれまでのエンジニアでもなければ、これまでの人文学者でもない。社会科学者でもない。例えば都市を設計し、建設して、その都市において人々が、ある程度満足ができる。さういふ経済的な生活の保障をえ、しかも、その都市において美しさと精神の統合を計り得るような、さういふ学科を提案し作らなければならぬという理由をもつて、さういふ学科を提案したのである。私は、まだその他に幾つかの学科を提案していますが、さういふことについてくわしく説明する時間はありません。しかし、社会工学科というものを作る過程において八年かかりました。できたのです。八年かかったのです。さういふものを作ろうとする過程において、例えば、一昨年、私は東京工業大学の教授会、あるいは大学全体の運営委員会など沢山の会議にりましたが、計算すると約二百七、八十時間出席したことになることがわかりました。二百七、八十時間というのは多いです。毎日八時間労働といたしましても、まず相当な日数になるわけです。でありますから、私が一月半くらい全く辛抱強く坐り続けて私の大学の教授たちと話し合つ

た。その人たちも立派な人たちなのです。現在の国立大学の機構というものが根本的にまちがっている、ということをお私は十分知っているのです。移転をすれば騒ぎが起こる。統合をすれば騒ぎが起こる。ビッグ・サイエンスというものを発展させようと思っても動きが取れないのです。それぞれの学部は学部教授会というものがありませんが、そういう学部教授会の自治というのは、自治の美名において多くの場合、既得権を擁護しているに過ぎません。私は教授会という自治の会に出席した人間として客観的証拠にもついで皆さんに報告することができるとは思います。つまり私は決して皆さん方を、立派な学生である、などとおだてるつもりはありませんが、皆さんの学生の自治活動というものが、おおむね建設的でなく、そして大体において保守退嬰的であって素晴らしい計画を含んでいないのが事実であるように、われわれ大学教授の自治というものも、おおむね退嬰的保守的であって素晴らしい計画とか建設を生み出すことはほとんどなかったわけです。その意味において自治、学生自治活動において、ただ反対を主張して何らの建設的提案をなすことが少ない、そういう現在の日本の学生諸君は、あまりにも忠実な教授たちの学生であるというほかはありません。それが今の大学です。

そういう大学で、こういうことが起っているか。例えば数学者というものがいます。数学者は理学部にいるでしょう。現在の社会が科学技術の文明であるとはまずならば、数学者の果たす役割というのはかなり大きなものです。そういう数学者たちはだんだんに日本からいなくなっております。東京大学の理学部長の弥永昌吉先生によると、国際的な学力を持って論文をかける数学者がわが国に約百

五十人いるのですが、そのうち三分の一がすでにアメリカ合衆国に渡って、永久ないしは半永久的契約のもとで働いています。三十歳前後の数学者というふうに限定すると約半数がもういない。そこで今から五、六年たつと、三十歳前後の数学者に会うと二流ではないかという疑いをもった方が大体当たるといようなことになるでしょう。実は、これは世界的現象であります。イギリスで毎年約八百人の学者がアメリカに頭脳流出します。イギリスの場合の頭脳流出というのは徹底的なものでありまして、何の誰それという人が流出するのではなくて、どこそこの大学の何々学科、それが部長以下そこに働いている事務員や奥さん、全部、そのまま組織として流出するわけです。ある日、気がついてみるとある大学のある学科がないのです。その理由は簡単であって、一つは英語が出来ること、それからイギリス人は今までむやみにやたらに大学の数を増さずにある程度計画的に進めてきましたから、まずイギリスの大学のどの学科もかなり充実している。そこでそれを学科ぐるみアメリカが買いつつても、そう困ったことは起らない。そういう問題があるわけです。しかしわが国の場合も時間の問題で、だんだんに多くの人が太平洋をわたってアメリカに吸い取られて行くであります。そういう情況に私たちは立っている。そういう情況をどう見るか、ということが恐らく現在の大学の問題です。

技術革新の意味

そこで私は、この時点で非常に単純な一つの話をしませう。いったい第二次戦争というのは何であったか。これは後世の史家がいろいろ評価するでしょう。しかし第二次戦争を見る一つの角度はあ

るのです。その一つの角度は何であるかという点と第二次戦争に本當に勝つた国と負けた国を比較して見るとわかる。負けた国は日独伊ということです。勝つた方は米ソ英仏。ところがそれから二十数年を経てみると、書類の上で勝つたのは米ソ英仏ですけれども、本當に勝つて世界を支配するようになってきたのは米ソである、ということをお私たちは知るわけです。イギリスの場合、さきほどのようにアメリカへの頭脳流出にみられる一種の混乱があり、そして不安があります。フランスにも同じようにグレート・フランスの再興という要求がありますが、しかし、フランス人に深い不安があります。さて、そう考えて見ると、あるいはイギリスもフランスも實質的に負けたのかも知れないということをお私たちは感じるのです。

そうすると勝つた国がどういう国であったか。まず、勝つた国は超大国です。二つの国の名前が非常に似ているのですが、一つはUSA、もう一つはUSSRと。そんなことは何でもないではないかと皆さんは思われるかも知れませんが、私は相当重要なことだと思ふのです。つまり、それらは今までの国家から考えるところの連合体であります。そして連合する一種の組織原理、哲学的原理を含んだ国であります。ソ連の場合は申すまでもなくマルキシズムというものがあるのであります。アメリカの場合には、例えば、建国のリバイという、そういう精神がそれであるのです。したがって国というものは無限に拡大するものです。つまり、もしマルキシズムに賛成すれば、それは新しいソ連邦に入っていくもう一つの勢力になるでしょうし、アメリカの組織原理に賛成すれば、それは五十州になり、五十一州になって、さらに拡大していく。そうした種類の

ものであるでしょう。要するに二つの国は資本主義、社会主義という組織原理上の鋭い相異がありますが、私はこのことはわが国においてしばしば誇張され過ぎていっているように感じてます。われわれとして注目すべきものはむしろ、この二つの国の類似性であります。私は自分の書いた「日本の大学」という本の中でもこの二つの国を比較的類似性の高い国として扱っております。

その二つの国にもう一つ特色がある。二つの国は実は技術革新の国である。二十世紀には世界のリーダーですけれども、十九世紀には後進国であったという事実があります。アメリカの社会学者のマーティン・リップセットという人は『最初の新興国』という本を書いたんです。それはアメリカ合衆国の歴史であります。要するにアメリカは西欧でありますけれども、十九世紀においては新興国であった。そしてヨーロッパに追いつき追いつくことが非常に重要な問題であった。ヨーロッパに古くからあつたりバティとかイクオリティというような哲学的原理もまた、これを革新的に再生するという使命をもつて生まれたメルティング・ポットであるわけです。その国において二十世紀になると技術革新というものが生まれました。技術革新とは何か。ここに理工系の学生諸君がおられればよく御存じのはずですがおおよそ三つぐらいのポイントが重要でしょう。一つはトランスポート・インダストリーの驚くばかりの変化です。つまりロケットというものが出来た。そしてそのロケットの力によってわれわれは今や月にも行くという時代に入りました。もう一つエレクトロニクスというものが発達してコミュニケーションが根本的に変わったのです。もう一つは動力が基本的に変つた。それはニュークリアー

・エナジーいわゆる原子力工学の問題であります。私たちの戦争を反省してみると、まず戦争中の第一回の徹底的敗戦はミッドウェーでした。ミッドウェーにおいてわが空軍・海軍はアメリカに敗北を喫しましたが、その時にどういふ問題があったかという点、敵はこちらを見ていた。こちらは向うが見えなかった。それはレーダーです。それはエロクトロニクスの問題であつたわけです。そして最後に私たちは焦土になるまで戦う決意をもっていましたけれども原爆が落ちて、敗戦にいたつたたのです。そう考えてみると、第二次戦争に敗北した国というのは、およそ、産業革命というものを地盤にした科学、技術、産業というものに依存していた国家ということがわかります。わが国がそうです。ドイツもそうです。フランスも、そしてイタリアもそうです。ところが勝つた国が実は技術革新というものを基礎にしているきわめて巨大な大衆国家であつたということが、今日、明らかであります。そういう意味が第二次大戦にあつたでしょう。

マルチバイシティ

ところがそういう大きな違いというものが、実は戦後の日本、戦後の世界を混乱させているのです。私は今朝まで、また午後も宝ヶ池の国際会議場で「都市と人間」という学会にでています。都市というものの名前が変りました。都市というものはかつてシティという名前でした。産業革命が十九世紀の中頃に完成したころ、都市はメトロポリスという名前になりました。そしてロンドンとか、パリとか、ニューヨークというようなメトロポリスができた。そこに大きなオフィスビルディングがあつた。下水が出来たり、交通が発

達したわけです。ところが技術革新が起つた一九四〇年代以後、さきほど申した大きな変化の後、何が生まれたかという点メガロポリスというものが生まれたのです。メガロポリスが生まれると、もう東京と関西というものは一つの単位です。現在、およそ日本に十万人程度メガロポリスに生きる人、メガロポリタンという形で暮している人たちがいます。長嶋も王もそうです。そういういわゆる娯楽の世界の人たちだけではなくて、行政者の中にも企業家の中にも、それからまた科学者や技術者の中にもメガロポリタンとして生きる日本人が約十万人はいるのです。

実はそれと並行して大学の名前も変りました。アメリカ人は大学を発展させて、今日まで来たわけですけども、大学はかつてユニバーシティと呼ばれたのです。ところが技術革新以後の大学をマルチバイシティと呼ぶ人がいます。そう呼んだ人はクラーク・カーというカリホルニア大学の学長です。疑いなくカリホルニア大学というのは、今日、世界を指導する最も強力な大学であります。その大学において十名内外のノーベル賞受賞者がいるのです。七つのキャンパスがあつて十二万人を越す学生がいるのです。そしてステイト・オブ・カリホルニアという日本と同じ程度の地域にアメリカの最高の頭脳の約三五パーセントが集まっています。現在、科学技術の世界で世界の最高の頭脳の八〇パーセントはアメリカ合衆国に集中しているとイギリス人のC・P・スノーは報告しています。が、もし、それが事実であるとすると八〇%のうち三五%つまり世界の約二〇%以上が、そのカリホルニア州に集中しているわけです。クラーク・カーにいわせると、そういう大学はIBMよりもジ

エネラル・エレクトリックよりもはるかに大きい。そしてそういう会社は機械とか、比較的同質的な労働者を相手にしているけれども、しかし、そういう会社と違つて大学にはノーベル賞をもらうような複雑な頭の人や皆さん方のように、若い盛りの希望にもえた人々が沢山いて、それを十何万人管理しながら、しかも学問的に生産的にするということは容易でない。こういうものは人類の歴史上初めて生まれたもので、もしかつてのユニバーシティというものが比較的単純で一つの役割りだけを果しているものだとすると、現在の大学がいろいろのことをやる。スペースの開発も、人間の創造性開発も、そして技術の中で疎外された人間の回復も、いろいろなことを考へる巨大な組織である。だからこれをユニバーシティでなく、マルチバーシティと呼ぶべきである、とクラーク・カーは言うわけです。

モリルの提案

ところが考へてみると、そういう大学というものを、いつか誰かが計画したはずなのです。そうでなければ、今、そういう大学があるはずはないのです。カリホルニア大学はわが国のます一流の大学と見なされる東京大学の約三百倍以上の予算をもつて動いていますけれども、そういう大学をいつ誰が計画したでしょうか。そして、一体、私たちは今何を計画しているでしょうか。この短かい私の話の結論として最後にお話しておくことにしましょう。そういうものを計画した人がいたんです。その人の名前を上院議員モリルと云うのです。アメリカで産業革命が終つたのは一八六〇年のことです。『最初の新興国』であるアメリカの産業革命というのは、ヨ

ロッパよりも約半世紀遅れました。そうするとアメリカの社会に不思議な変化が起つて来た。工場ができる。新しいホワイトカラーが必要になる。事務機構が必要になる。そういう時代の大学というのは、中世にできた大学と違つて何か新しい役割があるに違いない。そう考へてモリル上院議員が州立大学法案というものを一八六二年の議会に提案いたしました。彼の考へによつてこうなんです。つまりそれから後、大衆民主主義というものを完成して行くためには多数の人々を大学に入れなければならないのです。そうすると当然、月謝は安いということが必要な条件でしょう。産業革命以後に、さらに工業化というものが進歩する。それだけが人類の目的ではありませんが、しかしそれが一応経済の発展をもたらした人々の生活水準を高めて行くものであるとするならば、理工系部門というものを拡大しなければならぬ。それには文化系よりもよほど沢山設備費といふものがかかる。そうすると学生から月謝はとれないし、設備費はうんとかかる。そういう大学は私立大学ではできない。すくなくとも財政的には不可能である。収入が少なく支出が多い。そこで上院議員モリルは、アメリカは今までハーバードとかエールとかプリンストンとか、そういう私立の大学に依存して来たけれども、そしてまたアメリカは、いわゆる資本主義、自由主義の国であるけれども、大学の教育について徹底的に公立の道を選ぶべきであるといふ法案を提出いたしました。それは可決されました。そこでユニバーシティ・オブ・カリホルニア、ユニバーシティ・オブ・ウィスコンシンというように各州に一つ一つの大学が生まれました。

さきほど世界をコントロールし睥睨しつゝあるカリホルニア大学

について話しましたが、この大学が今の法案に基づいて事実上設立されたのは、一八六八年、わが明治維新の年であります。その時代の大学はハーバードと比べれば問題にならないつまらない大学であったでしょう。実を言うと、それから相当長い間、その大学はフットボールで有名であった。野球が相当つよいという大学でありました。しかしアメリカ人たちは非常に熱心にこの大学を立派な充実したものにするために苦勞したわけです。そこで大学を作ると、まず機械工学というようなものを重視した。農学部を作った。そういうことは全部法律に決められている。政府は金を出すけれども、すくなくとも農学の研究というものは絶対に必要である。ヨーロッパの伝統において、大学というものはヒューマニズム、人文主義にもとづくものである。人間を尊重するところであるのに、俗悪な新興国アメリカでは大学に牛がいる。そこでアメリカの大学をカウ・カレッジと呼ぶことにしようといつてさげすんだ人たちが沢山いたわけです。アメリカの東海岸の古い大学にそだつた人たちも、実をいうとそういう自分の国の新興大学というものをさげすみました。

私はそういうカウ・カレッジの一つであるオハイオ州立大学で勉強していた時に京都大学の助手でありました。当時の学長は鳥養利三郎先生で、先生がオハイオ州立大学を尋ねられ、その副学長と話をする時、通訳をしたことがあります。アメリカ人のなかには自分のことを自慢する人がいます。「京都大学にノーベル賞受賞者はいるか」と、こういったわけです。全く偶然に一人いたんです。しかもその時、その人は四十九年にノーベル賞を取った。彼はがっかりした。「京都大学は幾つ学部があるか」というと鳥養先生は「八

つある」とこつこついった。「京都大学に医学部があるか」「ある」「付屬病院はあるか」「ある」と。「ベッドは幾つあるか」というと鳥養先生は何百幾つとかベラベラと答えた。とにかく見事に答えました。そこでオハイオ州立大学の副学長はいくぶん残念気でありましたが、最後に「京都大学に牛は何頭いるか」と聞いた。そうすると鳥養先生は「ほとんどいない。実験用にいる場合があるけれども。」そうすると昂然として副学長は「オハイオ州立大学には二千何百何頭の牛がいる」と。「ここに日本とアメリカの違いがある」と。「ここにわれわれの発展の理由というものがある。君たちが尊重しなければならないものは牛である」とこつこついった。しかし、それは事実でしょう。

米ソの大学

もう一つの話をする、一八六八年、カリフォルニア大学が生まれた年、カール・マルクスはダス・キャピタルという本、資本論という本をヨーロッパで出版しました。ヨーロッパにおいては、産業革命の結果、富は増しましたけれども、旧来の関係が維持されたために階級の関係が悪化しました。マルクスの見るところでは、それを救う唯一の道は、そしてもう一度人間というものを回復する唯一の道は社会主義、そして共産主義の実現であったわけです。産業革命というものはスティームエンジン・ボートというものを可能にしたこと、大平の寝むりをさます蒸汽船と言つて今まで西欧に脅かされたカリフォルニア大学の、あるいはミシガン大学の人たちは実はマルクスに対して、というよりはヨーロッパの社会主義に対してかな

りの関心を持っていました。つまり、もしヨーロッパを社会主義に
よって改造するのであるならば、アメリカは自由主義を維持するけ
れども、しかし大衆的民主主義、大学から小学校にいたる徹底的な
教育の充実、そういう方法によって彼らと競争しようという意欲を
燃やし始めたわけです。そのアメリカが一応の成功をおさめた。そ
して二十一世紀も、二十二世紀も同じように発展し続けるかどうか、
そのことについて予言する準備は私にはないのです。ただ今日まで
のところ明らかなことは、一八六八年、おそらくハーバード大学と
比較をすれば問題にならなかつたカリフォルニア大学というのは、
それから百年たつた後にハーバード大学を圧倒する大学になつたと
いうことです。

しかしわが日本国にも、実は、産業革命の後に大学の再編成とい
う問題がありました。もし私の記憶に間違いがなければ、同志社大
学が法的に大学として昇格いたしましたのは大正八年の大学令の直
後であります。日本に産業革命が完成すると、日本にも上院議員モ
リルが必要でした。しかし、誰もそういう人はいなくなつた。そこ
で理工系を充実したり、巨大な公立大学をつくるという計画は日本に
は生まれませんでした。

おもしろいことにこの考え方をアメリカから受け継いで、もっと
徹底的に実現しようと考えたのはスターリンです。一九二九年の社
会主義第一次五年計画において、彼は、もしソ連邦が工業化社会
として将来発展して行こうとするならば労働者なわち労働者・農民
という旧来の勢力の他に学生・知識人という新しい勢力を養成しな
ければならない。そしてその相当数が理工系でなければならぬ。

まさにそういういわば革命的な宣言を行なうことによつてソ連の大
学政策の基本的転換を計つたわけでありました。その公約どおり第二
次五年計画が終るまでの十年間に、ソ連邦においては都市労働
者の数は二倍増いたしました。大学卒業生の数は三倍増いたしま
した。大学卒業生の中で工学部出身、建築出身、そういうような人
たちの数は約七倍から八倍になりました。それが第二次戦争におけ
るソ連の戦闘を助け、その後におけるソ連の発展を助ける重要な力
であつたことを私たちはよく知つてゐるのです。

しかし、日本にはモリルもスターリンもいなくなつた。そこで政府
は、ある程度、大学をふやしましたが、明確な政策はありませんで
した。私立を大学に昇格させてやれば、まあそこでもつて何とか大
衆社会におけるサラリーマン市場に出て行く人間を育ててくれるだ
ろうという無責任な態度をとりました。その結果、新島精神が稀薄
になつたのです。つまり私立は、大正の中期、膨張に膨張を重ねまし
た。もちろん今日ほどではないのですけれども、当時の人々は、そ
れを記録してゐるのです。その時に私立は伝統を守つて小さくやつ
ていこう。いや私立は大きくなつてこの産業社会、サラリーマン時
代に対応して良いという人との間に論争があり、そういう人たちの
間にちょうど今日のような大学騒動というものがありました。そし
てさわぎが続き、議論があつたけれども何の結論もなく、私たちは
昭和に入り、第二次戦争に突入いたしました。そして今日それにつ
いて何の結論も計画もないという点において私たちは大正八年を継
承してゐるようでありました。

大学の国際化

そこで私は提案したいことがある。この混乱した京都市、あるいは日本の都市、それから混乱した大学、これは産業革命程度の社会組織しか持っていないかった国が技術革新にゆきまぶられた時に生まれてくる避けられない混乱であります。しかし、われわれはすでに技術革新時代に入ったのです。入った以上その社会組織がいつまでも遅れている、遅れているのを傍観しているわけにいかない。そこで私たちは大学の構造の根本的な改革を計る必要があるでしょう。政府も考えるべきでしょう。政党も全てこの問題に政策をもつべきでしょう。大学に計画が必要でしょう。そして学生諸君もまた計画すべきでしょう。そしてそういうものが具体的に討議されて、いったい、この大学の壊滅の中からも一度日本の大学が立ち直れるか、もつとはつきりいって、この壊滅の中からも日本文化といものが、あるいは日本の社会といものが立ち直れるか。これを私たちは考えなければならぬ段階に到達したのです。おおよそ二つの事がある。

まず第一に、もう大学は大きいです。たとえば機械、そういう設備を考えますと、私は京都大学の教育字部の教師をやつていて後に東京工業大学にまいりましたが、実験設備の予算というふうなものは全くケタはずれに違うということに驚きました。それはあたり前のことであります。現在のハカリは電子ハカリというふうなものでも何千万円の機械です。あるいは、原子力開発のための施設というふうなものは、何百億円というものです。こういうものをそれぞれの学部教授会で議論して、その自治を守ることによつて解決するといふことは、ほとんど不可能であります。学部は小さな単位です。そこで少なくとも一つの大学において計画するという程度の統合

性が必要でありましょう。しかも統合しながらその大学にいる学生・教師のすべてが本当に自由であるという、統合と自由の問題、そこから来る葛藤^{かつと}についてわれわれは何らかの施策をもたなければならぬでしょう。しかし実をいうと一つの大学というふうな考え方をさえもう古いのです。京都大学の予算というふうなものはまことに小規模のものであつて、現在の科学技術の発展に耐えるものではないんです。私の大学、東京工業大学という大学もわずかな予算をもっているだけであつて、現在の科学技術の発展に耐えないのです。してみると、国立とか、公立とか私立とか、そういう枠を越え、学校を越えた、そして少なくとも日本的な統合機関というものが必要でありましょう。そして、それが計画的建設的な意味において自治をもつということが必要でしょう。

しかし問題はそこに留まらないのです。経済の自由化などという言葉がありますように、人間の自由化といふものが今や行なわれて、われわれの中のすぐれた頭脳は流出しつつあるわけです。そうすると、まず、彼らを留めしめるにはどうしたらよいか、というような政策が必要でしょう。また他の国からすぐれた頭脳をこちらの国に流入させるのはどうしたらよいかということも工夫すべきでしょう。私は東京工大の学生諸君にしょっちゅう言つたのですが、東京工大では日本人の先生が日本人を教えます。これは学生に気の毒です。なぜかならば皆さん方は社会にでて、もう四、五年もすれば日本人だけが生きるのではない国際社会で活動するでしょう。閉鎖的性格といふものを私たちが、学生諸君にうえつけてしまつてはわれわれの責任であるわけです。したがつて私は、大学の教師の役割

か二割は日本人でない方がいい、西歐人も朝鮮人も中国人も、そういう人たちが日本人を教えるということをも日本人が知る。この皮膚で知ることが重要である、ということをも主張しているのです。これにはいろいろな法律の改革を伴います。また大学の学生の全部が日本人であるということは全く望ましくありません。その相当数が日本人でない、いろいろの人が混っていることの方が皆さん方にとつて有利でしょう。私はアメリカに限らず、イギリスとか香港とか、そういう他の国で若い人たちを教える時に、日本人でありますから当然皆さんのことを思い出します。そして彼らの方がはるかに有利であるということを感じます。つまり彼らの中には、黒も白も黄色も、いろいろの人が混っています。そして、いろいろな者が意見をたたかわしている通常の体験の中で、要するに国というものではない、人類の世界で生きる方法について研究を続けているわけです。皆さん方は不利です。日本の大学教授も不利です。したがって、そういうものを変える組織、そこまで考えて行った時に、われわれの計画機構というものは、単に日本的、全国的というワクを越えて、たとえば諸外国の大学にどのようにならして日本の大学の改造をはかるか、というふうな国際的計画性を持たなければならぬでしょう。それが一つの側面です。

私立大学の再建

私立大学をどうするか。私が考えている案はきわめて単純です。私がかつて日本の私鉄が国鉄に吸収統合されて、国鉄が発展した。もうからない地方路線ももうかる中央路線も同じ運賃で運んでいるように、そしてまた、統合ができたために、設備投資を行って東海

道新幹線という日本の文明の中では類例のないすぐれたものを生み出した。そういう事実を見て明らかのように、私学というものも、その大部分を政府が財政的に支持することが望ましいと考えています。それには十五年、あるいは二十年、もっと時間がかかるかも知れないのです。最初は同志社とか、早稲田とか、慶応とか、そういうすぐれた学校であることが必要です。その先生たち全部を公務員にして、そして給与を安定させることが必要です。そういう大学には、現在、学生の数が多すぎるし、その人たちを追いつくわけには行きませんから卒業はさせますけれども、しかし、その年度から一年生の学費は国立大学と同じにして、学生の数は何分の一かに減らしたらいいでしょう。そうするとすぐれた学生とすぐれた先生と、そしてこの同志社がもつすぐれた組織というもの、あるいは施設というもの、それを生かして諸君の大学が日ならずして京都大学と拮抗する存在になるでしょう。その場合に政府から金をもらえばヒモがついて建学の精神が失われるのではないかと、言う人がいますが、それならば京都大学の学生や教師は諸君より自由ではないはずです。しかし彼らの方が自由ではないのですか。してみると政府から金をとって財政的には公立大学になる。その時こそ新島襄先生の精神によつて他に類例を見ない日本の良心たるべき人材を養成することは可能であります。志を同じくする人たちの結社にすることは可能であります。それはもつと小さい方がいいというふうにお考えの方があられるならば、それも一つの方法です。その場合には、同志社大学の大部分は新公立大学にして、その他に非常に小さなリベラル・アーツ・カレッジを、かつての同志社のようなものをどこかに

作る。そこにはもつともすぐれた先生、もつとも優秀な学生、そして現在の日本の資本主義が耐えうるほどの財政的規模をもつたりベラル・アーツ・カレッジによって非常にユニークな教育をすることのできるでしょう。早稲田も慶応も同志社も関学も、こういう立派な大学が、少なくとも第一次五カ年計画のうちに公立大学として姿を新しくして行くべきであります。第二次五カ年計画に、そうでないもの、第三次計画にそうでないもの、だんだんに言わば質的にすぐれた伝統を持つていないものもふくめて行くことによって、わが国に巨大な公立大学群というものが生まれるでしょう。

そこはお金があっても頭が悪い、良い家の子供は追いだしてしまふ組織であります。現在の私立大学を統けていくと授業料というのが高くなりますから、本当は大学に出来ない方が望ましいけれども、恵まれた家庭に生れたために大学に行けるといふ不要の人口をかかえなければならなくなります。こういう人たちは出ていってもらうことが望ましいのです。それは社会に民主主義を実現していくために必要な措置である。諸外国においてで行なわれていることです。いつまでも、わが国における良家の怠け者の娘や息子を優遇するために新島襄先生の精神を汚す必要はないのです。そういう人は、むしろ早く社会に出て、苦勞を味わって、金があるということがどんなに人間をスポイルするかということを学習することの方が必要なのです。そういうことを行ないますと巨大な公立大学群というのが生れます。そしてその回りに、公立大学がともすれば企画あるいは統制という方向に傾きやすい時に、それを鋭く批判するような小規模の私立大学を配することによって、公私立の緊張の中に大衆

社会、工業化そういうものを発展させながら、しかも人間の価値の回復を計るということは、われわれの目標でなければならぬでしょう。そういうことは可能である。

現在、わが国に約百二十四万人の大学生がいます。その数は多いです、八百の大学があります。その約半分は短期大学であつて、大多数、百二十四万のうち百万ほどは四年制大学の学生です。この数はもつとふえるべきでしょう。ただ現在の状況でふえるべきだとは、私は思わないのです。現在には不要なつまり来なくてよい、あるいは来ない方が望ましい人が来ている傾向があります。

日本の近代化とは何か

アメリカ合衆国は現在約六百万人の大学生がいます。そのうち百万人が大学院の学生であります。日本の大学の学生と匹敵するのが大学院の学生であります。この人たちが技術革新を推進し、そしてその中で人間をどうコントロールするか、人間の価値をどう回復するかということを工夫しているわけです。私たちはその国に戦争によって敗れました。しかし戦いには勝敗があり、そして敗北は明らかであります。実は平時において文明は一種の葛藤と、競争の中に生きています。知らぬ間に敗北することはあるのです。私は第二次戦争における日本の敗戦よりもつと深刻なものは、第二次大戦後の日本の敗北であるというふうに感じています。そしてわれわれは時々刻々敗北しつつあります。実は、都市の問題で宝ヶ池の国際会議場に出て、私は、今朝も、時々刻々敗北しつつあることを痛感しながら、ここに來たのです。そこで、大学と都市と、さらに言うならば低開発地域と、それは技術革新期が生んだ世界の新しい

問題でありましょう。この問題にわれわがどう対処するのか。そしてその中で日本文明、そして日本人というものがどんな貢献を行うことによって存在理由を持つのか。それともこの程度の状況で満足して、要するにある程度アメリカと仲良く暮して、そうして下請け工業化というものを進行させて行けば生活程度は上がるし、自動車には乗れるし、そういう形での一種の文明の従属性、それでいいということがもし大学学生諸君や日本人大多数の決心であるならば、私は何もいうことがないのです。ただ私は、日本の輝かしい過去の文明の歴史というものを見た時に、現在の日本は実力を発揮していないということを感じます。

もつと具体的な話を最後にして締めくくりにしましょう。皆さんがお生まれになった京都、育った京都、私はこの京都に十八歳くらいの際に来て京都大学の学生になりました。吉田山に登り、東山を歩きました。そして京都の町を見ると実に美しい町でありました。家とか寺とか、それから庭とか、そういう個々のものが美しいというだけではなくして、町全体に一つのデザインというものがあつたんです。そのデザインは七世紀にできた。町にいろいろのシンボルがありました。清水寺の塔とか、御所とか、そこで人口百万の都市でありますけれども人間の精神を統合する一種の古い都市文明というものがこの町にあつたんです。ところで今、私は京都ホテルの八階に泊っています。そして毎朝窓を開けて外を見ると、京都の町はアメリカの三流の町だという感じを強く受けます。人口十四、五万程度の、あまりたいした工業のない非常に醜い町に似ているのです。おかしな塔があり、安物のビルがある。しかし、われわれ日本人

は、科学技術の変化する中で生活水準の向上や工業化をはかるためには、あのビルも必要でありましょう。そして自動車も必要でありましょう。それを否定することはできません。しかし、私たちにとってより大きな課題は、それではそれがあがる程度の段階に達した時に、京都市というものが最終的にアメリカの三流の都市から、二流の都市、そして一流の下の都市になれば、それで私たちは満足するのか。それとも、その時につくる京都市というのは工業化も生活水準というものも、相応にすばらしい成果を上げるけれども、しかし西欧にない都市美を持った、西欧にないデザインを持ったそういう町を作るのだろうか。これは具体的な問です。

われわれは西洋の偉大な挑戦を受けて、その挑戦の中に敗北を重ねて、三流の西洋になることに満足するということが良いのか、それとも西洋に深い敬愛を持って、それを摂取して西洋もなし得なかつたほどの大学とか、都市を作ることによって彼らにも貢献するという程度の文明であろうとするのか。それは私の講演が終つた後に皆さんが心にいだいて問うていただかなければならないことです。私について言うならば、今日の状況の中でこの問をかみしめる、ということとはきわめて困難です。そして私たちはしばしば絶望的になる。しかし、絶望的になる状況の中で、誰かが、というよりは貴方が、いや自分が、もし再建しようとしなければ、誰も再建しないであろう。そういうことでもあります。これで私の話を終ります。

(付記) ここで述べた大学の問題について、一層深い関心のある方は拙著「日本の大学」(中央公論新書)を参照していただきたい。そこに大学研究の文献もあげてあります。

(東京工業大学教授)

社会事業史と「同志社派」

— 源流・精神・実践 —

—

藤田省三氏の「維新の精神」(みすず書房・昭四二)は清新な視角で簡潔な論述が展開されていて深い感銘をうけた。明治五年の「マリヤ・ルス号」事件についての評価も実に面白い。マリヤ・ルス号は南米ペルーにはこぶ奴隸二百数十人をつんで航海していたところ暴風にあつて横浜に退避してきた。一人の奴隸が逃亡し、その惨状を訴え英国の代理公使を通して救出を日本政府に依頼した。政府はこの船を差押えて中国人の奴隸を全部解放したが、これが国際裁判になつて、ロシア皇帝が裁判の法廷を主宰した。日本の主張は通つたのだが、ペルー側の弁護人から「日本自体に奴隸がいながら、他国の奴隸売買を攻撃する資格が日本にあるのか」と反論されて面くらつた。藤田省三氏によると、当時の変革期の日本の政治指導者は今の日本の政治的指導者とは違つて、ナイーブな「無知の自覚」を

小倉 襄 二

持っていたから、わからないことについては率直に検討するという精神があつたという。ここで江藤新平とか副島種臣などの濶達な判断によつて、断行したのが「娼妓解放令」であつた。日本政府の態度は「文明の通義」つまり世界中の人類に妥当すべき道理の前にはそれに従うという精神の顕現としてとらえている。私自身の抱いていた軽い意味での名分論やおいつめられた体面保持として娼妓解放を行つたという皮相な見方を修正したいと思つた。

明治初期には、二つの「暗黒」があつた。島田三郎によると「監獄と遊廓」だという。富国強兵、殖産興業、文明開化の激流のなかで、この二つの暗黒の集中表現するもの、その意味するところは峻烈であつた。時代の変革のなかで「治安」とは、有司専制の暴政を強行する手段であり、この体制に反逆し、生活に追いつめられた人々が獄囚となつた。治安のためにはポアソナードを憤激せしめた拷問も白日のもとに横行していた。明治二十年にいたる本源的蓄積の

なかで創出された自由なる労働力の典型は、出稼ぎ型^ケの「工女」であり工女の創出は、幕藩体制以来の廓の女、「娼妓」の給源とそ
の社会的基盤をひとしくしていた。維新以降の農村の階層分化と窮
迫流出、あるいは都市貧民の増加によって、工女も娼妓も、ともに
苛烈な心身の収奪にさらされることになった。

近代社会事業の源流は、まず、この二つの暗黒に対する発言と対
応として形成されたことは偶然ではない。文明開化のなかで、監
獄と遊廓^ケはなによりも「文明の通義」に反する事態であり、識者
の注視を要請するものであった。

明治二十年より二十五年にかけて、同志社を卒業した青年たちが
挺身を志したのは「監獄改良事業」であった。監獄改良事業への着
手は、すでに明治五年に來日したベリー博士が実行し、日本人とし
ては、自身も囚獄の惨苦をつぶさに体験した原胤昭が先駆者である。
大井上輝前は空知集治監の典獄であり、囚人の教誨にキリスト者
を用いることを意図し、その相談にあずかったのが金森通倫、小崎弘
道であった。その推挙によって、当時、丹波第一教会の牧師であ
った留岡幸助がキリスト者の教師として空知に赴任することにな
った。明治二十四年のことである。留岡幸助の努力によって多くの同
志社出身者が監獄教誨の仕事に入ることになった。松尾首次郎、末
吉保造、安部政恒、大塚素、水崎基一、山本徳尚、牧野虎次とい
う人々であった。監獄改良や、教誨の事業にたずさわった期間の長
短もあり、その後の人生も多彩であったが、二つの暗黒の一つ「監
獄問題」を機縁としてその後の社会事業（慈善事業）の実践が展開
していったことは注目してよい。

生江孝之は、同志社出身のキリスト教徒の多数が教誨師として、
監獄改良事業に当たったが、その人々が辞職の後に、社会事業のあら
ゆる分野に入り込んで活躍して、今日の社会事業を造り上げたこと
は、キリストの一粒の麦^ケ、一粒の芥子種^ケのたとえにも似て興味
があり、意義深いと述べ、明治二十八年に彼らが新任の典獄との間
の意見の衝突によって、連袂辞職をした事件はキリスト教社会事業
史の一画期をなしたものであり、監獄改良事業がその後のキリスト
教社会事業を生んだともいえるといっている。「同志社派」という
のは、便宜的なよび方ではあるが、このあたりの事情のなかに共通
の思考、精神のかたちがあるともみてよい。

留岡幸助は、明治三十年以降、もつともすぐれた慈善事業の実践
者、理論的指導者となるが、新島襄の平民主義^ケ最後の小さき、虐
げられし者^ケへの関心をその少年感化の事業、家庭学校の経営に具
現することになった。留岡幸助における精神は複合的である。新島
襄の平民主義、その内実は、キリスト教的人格平等観、自由民権思
想、人道主義の綜合がみられるが、さらに、留岡幸助は、ベスタロ
ッチ、ラスキンの論理と信条を摂取した。徹底した実践者としての
留岡幸助は、キリスト教は^ケ西洋臭い^ケという批判をもち、一方で、
二宮尊徳の報徳思想に深く傾倒するところがあった。彼の発行によ
る「人道」という機関誌のタイトルも、この尊徳の天道に対する「人
道」（人工管為の道への奨励）という意味で名づけられている。獄
囚の一〇〇人のうち七〇人は幼年期にその要因があるという立場
から感化救済事業の経営を行い、慈善問題の開拓的な理論指導を
も行った。岡山孤兒院の石井十次とくらべても、彼は平明で、合理

主義者の側面をもっている。

「西洋臭い」というキリスト教批判とともに慈善事業の経営の基本的要素として宗教・信仰をあげながら、そのとらえ方がプラグマティックな方便・手段化されている傾向もみられる。貧富相和して財宝生ず、労資協調的な改良主義発想も、この信仰への寛容さ々と無関係ではない。多角的な社会的実践における成果が外在化されて、そこに確認された「救済」の重さが自己目的となってしまう。

キリスト者の社会事業における、キリスト者の立場とはなにか、平民主義の原理的部分としてのキリスト者の信仰そのものと、事業のかかわりが多元的に分断されていくが強烈な実践者、留岡幸助には、内面の救済がつきあがる危機意識は稀薄である。報徳思想「働き主義」―日本資本主義下の「人民」の酷烈な自助へのエトスを支持する複合性にもこのことが看取される。いかにも苦勞人らしい風貌のなかで、彼が感化教育した少年たちが生きぬいていかねばならぬ状況への配慮が働いていたとしても、この多元的発想と救済の外在化、業績主義的思考は「同志社派」の特徴をあらわしているのではないだろうか。

二

「見玉ひよ、廃娼論者の運動を、キリスト教の提灯を持ってゆくのはよけれども、目先チラチラボンヤリと、一寸先は真つ暗で、道かたんぼかわからない、口に道徳説きながら、奇麗に衛生説きながら提灯持ちがどぶに落ち、汚れた衣をつけながら、徳義問題生意気な国家問答よしてくれ：ヨサナキヤ其時、ヤツケロー」明治二十年

から二十五年にかけて、壮士演歌としてうたわれ、ヤツケロー節として島田三郎、中島信行、その廃娼運動を批判したもので、ついで、明治三十年代に入ると自由廃娼で廓は出たが、ソレカラナントシヨ、行き場ないので屑拾い、ウカレメノストライキのストライキ節になる。添田知道氏の「演歌の明治大正史」に集録されている。もう一つの暗黒―公娼制度に対するキリスト者の対応についての演歌による痛烈な諷刺である。

「文明の通義」による解放はよかったが、人身売買の暗黒はいぜんとして社会問題として再生産されていた。「同志社派」の巨峯、山室軍平が救世軍によって展開した実践がまずこの公娼制度への挑戦、廃娼運動であった。この場合は、ロンドンに万国本営をもつウイリアム・ブースの創始による救世軍という戦闘的な宗教組織、とくにそのイースト・ロンドンのスラムクリアランスにはじまる社会事業活動への接近、その影響は当然の前提であるが、徳富蘇峯を通して知った新島襄の同志社で学んだ数年が山室軍平の行動の起動力になつていたことはいまでもない。たしかに、その運動には演歌がグサリとその限界をついたように、また「現象の皮むいたところにこそメスを入れなければダメだ」（添田知道氏）の批評が妥当するような運動ではあつた。自由廃娼へのすさまじいエネルギーの集中、婦人の更生保護事業、授産事業の開拓、安部磯雄、島田三郎、矢島樽子らと結束した廓清会の成立へと息の長い廃娼運動が平民の福音に象徴される大衆への接近と啓発、宣教、山室軍平の軌跡とその大河のような実践は周知のところである。ここにも、留岡幸助と共通するものが底流としてはげしく動いていることを思わずに

はおれない。

新島の門下から、社会事業への実践と思考に傾倒する人物が輩出し、日本の近代史に一つの流れを形成した。その流れは決して、社会の表層に大きくうかびでるものではなかったが、これを無視しては、日本の近代史を語ることはできない。このことは藤田省三氏が一つの原点・基軸としての内村鑑三の信仰と救済と賀川豊彦、山室軍平の場合を比較する分析の視角とも関連する。賀川豊彦、山室軍平における「救済」の観念は「人を罪から救い」「他人の救いのため」に戦う、人および人の関係の、人による救いである。自分自身は救われているというのだろうか。内村鑑三にあっては、内面の単独性についての強い自覚があり、救いはどこまでも単独性をもって扱えられ、その特殊な魂の救済は、それゆえにこそ普遍的な人間の救いとして考えられ、さらに普遍的な救いであるからこそ「靈魂に限らない」で「国家」や「社会」に及ぶはずのもと確信されていたのである。「同志社派」の人々には、たしかに、その生涯と思想において、内面の単独性 (loneliness) に触発されたものを、その生涯の本源的実践の契機とする面がすくなくあったし「キリスト教に特殊積極的な人間に関する普通の『救い』が現実的な特殊人の特殊面における(囚徒とか娼妓とか、不良少年、貧困者、小倉) 一時的な救いに癒着され混同されているのである」(藤田省三氏) という評価は妥当するであろう。内村鑑三への理解の不十分さから断定することはできないが、この鋭く確固とした信仰のもつ「救済」の弁証法、単独と普遍、何によって根源的に義とされるか、この基軸のあいまいさが「同志社派」とくに、留岡幸助と山室軍平にあらわであ

ることはひとめざるをえない。社会正義への提言が、キリスト者の信仰から、体制内で順応し、容認される道徳と説教に墮しざる危険があった。さきの演歌の諷刺のように、体制への眼はついにひらかれず、禁酒、家庭の和楽々衛生健康々々救いはすこやかな心身を与える々といった体制ワクに恭順するモラルとしての展開をとげることもなかった。吉屋信子の「ときの声」が描出しているように、山室軍平の清貧と克己精励は超人的であった。それだけに、彼の信仰は平明で、外在的は廃娼運動をはじめとする救世軍の社会的活動に不屈の没入をしている。藤田省三氏においてはこの信仰生活と内村鑑三の信仰との比較が問われているのである。しかし留岡幸助も山室軍平もそれを「妥協」とは考えなかったにちがいない。暗黒・社会問題への完全な国家、公的責任の回避と不在のなかで新島門下の「平民主義」がとらえた視点からただちに現実ときりむすぶ苛烈な実践がまらうけていた。重く、てひどいこの領域の構造、その結節を一つ一つを切開していく思考と実践の集中のなかで、信仰のかたちが変容し、「救済」の意味をそのてごたえのなかで証しする以外にいかなる場面も求めえなかったのかも知れない。この「没入」が、留岡幸助や山室軍平らの存在の意味であり、それにづく八浜徳三郎、小塩高恒や現実の同志社出身の社会福祉事業に働く人々の系譜があり、この分析と評価が社会事業史にしめるそれにつづく「同志社派」の位置を確定する基本的論点となるのではなからうか。

(文学部教授・社会問題)

社会福祉事業の問題点とその対策

住 谷 馨

「仏をつくつて魂入れず」という言葉があるが、わが国の社会福祉事業はこの言葉通りの現状である。戦後、社会事業は社会福祉事業とよばれるようになった。この名称の変更は戦前の社会事業と戦後のそれを本質的に少しでも変えようとする努力の現われでもある。しかし、現実と呼び名を変える程度では到底追いつかない。最近、大阪の釜ヶ崎を愛隣地区と呼び名を変えたが、地区の現実は依然として変わらない。日雇労働者の生活は地区の名称の変更にかかわらず同じである。「名は体を表らわす」というが、内容を変えようとして名を変えるのは本末転倒している。それは、むしろ、現実の回避であり、現実からの逃避といつてよい。要は名称の問題より、実態がいかに日々改善されるかという問題である。過去の日々より、現在の日々がどのような面で進歩と改善がみられるかという、目で見、肌で感じられるものがなければ、いくら名前を変えてみても意味がない。社会福祉事業も、この意味で戦前の社会事業と質的な実

態のちがいがみられるかどうかということが第一に問題になる。

*

戦前の社会事業と戦後の社会福祉事業は確かにちがうし、それは、正しくいえばちがっていなければならぬのである。それは、極端にいえば名称の変化以上にちがっていなければならぬはずである。そのちがいは、戦前の帝国憲法から平和憲法へ、絶対的な天皇制社会から民主主義社会へ変革されたのと軌を一にしているといつてよい。わが国の平和憲法、民主主義が真にその精神、その理念、原理を体現しているかどうかは社会福祉事業の分野で一番明確に示されるのである。

社会は革命という手段をとらぬかぎり、そう急激に変化するものではない。敗戦とアメリカによる占領は、一時期においてある程度革命的な変化をわが国に与えたことは事実である。しかし、その衝撃は資本主義経済体制の再整備とともにわが国の体質まで変化さ

せるまでには至らずに終ってしまつた。社会の基本的な枠組みは依然として健全であり、繁栄のなかの貧困の裾野は広く拡がったままであり、経済の二重構造といわず、三重、四重の重層的な格差と系列化は強化され、営利本位なものの考え方、弱肉強食的な態度と姿勢がいたるところで氾濫し、どっちを向いても不平と不満が満ち満ちている。戦後日本の復興はめざましく、敗戦の爪あとはきれいさっぱりなくなつたようであるが、この戦前に勝る物的生産力と豊かさの反面、戦前に勝る生活不安と不満は一体どうしたことであろうか。この繁栄のなかの貧しさと生活不安、物心とももの困窮に対応しているのが、今日の社会福祉事業であり、社会の繁栄の犠牲になり、その皺せよとなり、社会の底辺に堆積される問題の解決に四苦八苦しているのが社会福祉事業の現状といえる。したがつて、社会福祉事業は社会福祉の最も必要な階層なり、人々のための事業となり、社会福祉の切実な要求をいかによく充足させるかという事業となつている。これは公私の社会福祉事業ともども同様であり、切実な福祉要求は社会の多様化、流動化とともに多形になつてきている。従来、潜在化していた福祉要求が時代の流れとともに様々な形で表面化してきていふといつてよいであらう。

*

たとえば、児童福祉の問題をみても保護に欠ける児童をはじめ、非行、情緒障害児、精神遅滞児（精薄児）肢不自由児、重症身体障害児、不就学児、鍵っ子、保育所、乳児院、視覚・聴覚障害児など、それぞれに分化し、専門の対策が必要となつてきている。専門的に進んでいる分野もあれば遅れている分野もあり、同じ分野での

るとその多い。マスコミのおかげで、ある一つの問題が脚光をあび不均衝も分野だけの対策が進む。先年、水上勉が「拜啓、総理大臣殿」と中央公論誌上で重症児問題を提起し、その対策の無に近い状態を訴えると、政府はやつと世論におされて、その重い腰をあげはじめるといつた形である。

社会開発を主要な施策の柱にしている政府であるが、社会福祉事業の対象は拡大し、その分野は拡がっているにもかかわらず全般的に停滞しているのが見立っている。児童福祉施設は老朽化し、自力で改築修理できるころはよいが、その多くは児童を収容するにはあまりにもお粗末な状態である。これは一人、児童福祉の分野にかぎらない。およそ、社会福祉事業と名のつく施設は日本の貧しさを象徴しているといつてよい。保育所は狭く、児童で溢れ、老人ホームは入所できない老人の方がはるかに多い。そして、あらゆる施設は人手不足である。一億近い人口を有するわが国で社会福祉の分野は財源不足で労働力を雇い入れることができない。社会福祉をおし進める物的不足と人的不足が当面の一番大きな課題ともいえよう。

造船、鉄鋼、電気産業、製薬など世界でもその生産高と技術は一流の水準に達するほどの経済成長をとげた反面、公害、住宅難、交通災害など相つぐ社会問題をひき起こしていることは経済のみならずとか、資本主義の矛盾とか、政治の腐敗といつてすまされぬ国民の日常的生活の基本的権利と社会保障の侵害といえるのである。とくに、社会福祉の視角から、その対象になるべき問題を考へてみた場合、この生きる権利と保障の侵害は非常にいちじるしい。最近の朝日判決にみるごとく法的規制力さえ弱体化しているのである。

*

なぜに、このように国民の日常生活にかかわる社会福祉の問題が遅れ、停滞しているのか、福祉国家を標榜し、国民の生活水準の向上を謳いながら、なぜに現実の社会福祉は向上しないのか、それはまったく不思議というより、奇怪なことといわねばならない。明治以来、先進諸国の文化と文明を摂取し、融合してきたわが国であるが、先進諸国の社会に底流し、土台となつてゐる基本的な人権思想、キリスト教の宗教的基盤、民主主義など、目で見えない思想・信条の精神的哲学的な文化は一部の知識階層の間のみ導入され、日本人の精神構造を形成する一般的な生活の糧にはならなかった。日本的なもの、西洋的なもの、それは、それぞれに特質があり、よさがある。各国の文化の独自性は勿論尊重され、理解されなければならぬ。また、消化不良をおこすような異質な文化は摂取する必要もないのであるが、しかし、社会をささえる制度、機構の形態、外形を摂取することのわが国の能力は高く評価されているにもかかわらず、その内面的な尊厳性、伝統性の理解と摂取は容易なことではなく、民主主義のABCでさえ消化不良をおこしているようなところがある。

社会福祉が進まない目に見えない大きな理由は、この国民性ともいふべきわが国の伝統的文化の習性のなかに根深く存在するといえよう。生活困窮の原因は個人に還元するというより、その家族に還元し、家族の責任で保障し、解決していくこうとする家族枠内の閉鎖的な全面的解決装置はすこぶる強固で有力であり、われわれの生活態度のなかにごく自然に浸透し、生活感情にまでなつてゐる。家が

貧しいのも親の甲斐性がなく、家族の能力なり、素質が悪く、親戚にまでその関係がおよぶといった連鎖反応的相互扶助機能は、社会から身を守るといった自己防衛の構えであり、社会そのものをよくしようという構えにならない。新民法は家族制度をなくしているが、もし、現在、生活保護を申請しようとするならば社会福祉事務所は自明のこととして親族関係を調査し、近親者による援助の可能性を探索する。そして、社会責任による援助より、まず、家族枠内による援助を前提とする。生活保護法は社会保障制度のうち、とくに社会福祉部門の主要な柱である。戦後、この法律が成立したおかげで、わが国ははじめて国民の最低生活を守る保障が可能となつた。

家族の枠内援助のない貧困者はこの保護法の規程内生活をする権利をもつたのである。この法律は生活・医療・教育・住宅・出産・生業・葬祭の七種類の扶助に分類され、保護を申請することにより、適格者は扶助をうける権利をもつのであるが、その適格性の基準には家族の枠内援助がないことを前提としている。この最低の生活保障の権利でさえ、家族の完全崩壊がなければ発動しない。それほど、わが国は家族が核となつた社会である。

社会福祉という家族責任を越えた社会責任という広い次元の問題は、まず、家族という高いハードルをとび越さねばならず、この家族のもつ社会的機能が社会福祉の不完全さを結構よく補完しており、反面、また、それゆえに社会福祉の制度の充実を阻害しているともいえよう。

*

社会福祉事業は戦前の社会事業のように慈善事業ではなくなつ

た。個人の善意、恩恵、同情といったような宗教心、博愛心、隣人愛の産物ではなく、民主主義社会の制度として位置づけられ、福祉六法（生活保護法・児童福祉法・母子福祉法・老人福祉法・身体障害者福祉法・精神薄弱者福祉法）によって国がもつべき責任の所在が明確にされている。福祉事業はすべて法の社会的な体现機関であり、施策である。その内容の充実は国家の責任であり、義務となっている。民間の施設も公的施設もその社会的役者と制度的な位置には変りがない。そして、社会福祉事業は社会保障制度の主要な一環として社会体制のなかに組織化されている。社会問題化する事象の多くは社会福祉事業が対応することになっている。もちろんその守備範囲はまだまだ狭いが、福祉事業が専門分化することによって自然に守備範囲も広くなる。ただ、その推進力になりうる地域社会の住民の生活の仕組みや社会各階層のイデオロギーのなかに反福祉的要素が働き、さらに、その要因をふみ台として政治・経済上の反福祉的権力が構築されているところに社会福祉事業が停滞する大きな理由がある。この障害を除去すべき政治のなかに、社会保障という社会的責任を家族責任に転化しようとする傾向が強いのである。

社会福祉にたいする指導性は行政の立場からはきわめて弱く、社会福祉を支えている力は戦前からの社会事業家のなみなみならぬ努力によっている。国がもつべき大きな責任は最少限にきりつめられ、その最少限の責任を社会事業家の最大限の努力にゆだねている。それは、現在、社会福祉事業従事者の低賃金と過酷な労働条件にみることができ、そして、さらに、その搬寄せが対象者にかかっている。生活保護基準の低さも施設への措置費の低さもすべて国

家責任のきりつめによる搬寄せである。防衛五カ年計画で幾兆円という国家予算が組める以上、社会福祉の三年計画、また、それ以上の長期計画で幾兆円の福祉予算が組めないはずはないのであるが、現実に健康保険の改悪にみられるように公共費用は依然として国民の自己負担にゆだねる方向をとっている。一体、国民はどういう目的で高い税金を支払っているのか、強い自覚と見識をもつべきである。

しかし、社会福祉事業はこの政治の姿勢、一般の無理解のなかにも戦後は一步一步その実をあげていることは事実である。社会事業の専門教育も拡がっている。ケースワーク、グループ・ワーク、コミュニケーション・オーガニゼーションという社会事業の科学的な技術も次第に認識され、専門職業化しはじめている。この段階で、さらによりよき対策をもつとするならば、社会事業従事者の組織を強化し、全国的な規模で組織体制をつくることと、社会福祉要求をもつ人々が家族の枠組みを自から打破して社会責任の所在を明確にする組織的な社会活動、社会運動を展開することである。その要求を自治体行政に反映させ、さらに中央政府に反映させる運動以外、現状打開の道はないように思われる。この社会的な福祉要求の勢力があつて、はじめて社会福祉事業に魂が入るのである。

（文学部助教、コミュニケーション・オーガニゼーション）

社会事業の伝統の中で

井 垣 章 二



同志社において新制大学への切りかえが行なわれたのは昭和二十三年、そして新制大学

院が設置されたのは昭和二十五年のことであった。昭和の初めに生まれ、わが国最終の軍隊生活もほんのちよっぴり経験し、復員して戦後の人生のスタートを同志社専門学校で切った私は、その新制大学の第一号であったし、また新制大学院の最初の入学者でもあった。そこで社会学や社会事業について学んだ私は、こんどは社会福祉学専攻の学生を教える立場にかわり、すでに幾百のその卒業生を送るまでになってしまった。あの当時からみると、社会も学校も学生もずい分と変わったし、社会事業の実践や研究の面についても大きく変ってきている。こうした私の体験を通して、

同志社と社会福祉のつながりや、現在における問題などを考えてみよう。

*

留岡幸助や山室軍平など、日本の代表的な社会事業家を世に送り、すでに昭和六年に社会事業専攻を設置して社会事業の大学教育の先端を歩んだわが同志社が、社会福祉学の新制大学院の設置にわが国のトップを切り、以後数年間、この種の全国唯一の大学院として君臨したのは、その伝統からして当然のことであろう。入学式に列席したわれわれ専攻学生は同志社からの五人と他校からの二人の計七人であった。当時の大学院の校舎は烏丸上立売西入ルのかつての中学の寮を改装したもので、窓からは草の生い茂った庭が見え、今

からすると牧歌的な雰囲気があった。柿の木などもあって、赤くなりかけた小さな柿をみんなでかじってみた想い出もある。ごく小さな教室に先生と対面するような毎日の講義は楽しいものであった。物音一つしない静かな環境であった。新しい学問であった。今では社会福祉学校の基礎科目として定着し、その名の書物も沢山市販されている「ケースワーク」「グループワーク」「コミュニケーション」「ガゼイション」などは、その頃では全く耳新しいコトバであり、大学の科目名として異様な感じがした。社会事業にかんする出版物もほとんどなく、海外のものもまだまだ入手困難で、アメリカ文化センターへよく本を借りに行ったものであった。

「あなた方はここを出れば民生安定所長ですよ。」当時のわれわれの主任教授、故竹中勝男先生の如何にも感に入つたような声、横でニコニコみつめられていた嶋田啓一郎先生の顔——入試面接のこの情況は何か忘れられないもの一つである。当時、社会事業の分野

において大きな変化が起りつつあった。ひと口にいつてそれは、終戦後の混乱を脱出して新しい社会事業の方向が次第にかためられていく時期であった。たとえば、国民の最低生活の保障にかんする公的扶助についていえば、昭和初期の「救護法」は昭和二十一年、「生活保護法」に改められたが、それは結局応急措置的改正にすぎず、いろいろ不備であったから、この二十五年に根本的な改正が行なわれたのである。これによって生活保護業務の中心は、民生委員（方面委員）から民生安定所（福祉事務所）へ、民間人から公的な社会福祉主事という専門職にとつてかえられるという大変革がなされたのである。一方、ちょうどこの時期、社会保障審議会は「社会保障制度に関する勧告」案のいよいよ本格的な検討に入っていたときでもあった。わが国社会事業界は以後限りない変化をとげていく

ように思えた。最高の社会事業専門教育を受けるわれわれにとつて、竹中先生のお言葉通り、洋々たる未来があるようであった。

新しい知識のほか、大学院での収穫は、三名のアメリカ女性教授、とりわけ故ジェーン・グラント夫人とメアリー・ウッド夫人——このお二人のわれわれ専攻への貢献は計り知れないほど大きい——から、アメリカという国、デモクラシーというものを、まことにあの尊敬すべきお人柄を通じて知ることが出来たこと、そして同級生のほか大塚達雄現教授や、現在、心身障害者問題について開拓的な仕事をしている出口光平氏など、すぐれたよき仲間が得られたことである。みんな社会事業に関係のある何らかの仕事をしており、年に数回、集って飲んだり話したりしている。家のように気楽でしかも頼りになるすばらしいグループである。

昭和二十八年、社会学科助手——三十年代には社会福祉の諸制度は次第に整備され、海外とりわけアメリカからの社会事業技術、知識のとり入れはますます盛んで、社会福祉学を設置する大学の数は恐ろしく増えていった。現在、何と多くの学校が、そして学生が

あり、またその出版物も多いことであらうか。仕事の領域も拡大している。それらは確かに大きな前進には違いなかった。しかし、見えるものがみんな見えてしまつており何か枠がはまつてしまつた窮屈さも一方では感じる。

あの私の大学院時代——新しいものがいよいよ始まろうとする茫漠たる未来への期待、無限に似た可能性への予測、そんなものではなくなつてしまつたようだ。社会事業における専門化は確かに推進されたが、のびなやみといったものを感じる。気を落すのでなく、「ローマは一日にしてならず」と銘記すべきなのであろうが……。

*

全体の学生数の増加とともに、われわれ福祉学専攻の学生も倍増し、社会事業を勉強する動機もさまざまである。一般に現在の学生についていうと、試験といえは大騒ぎするが平常の努力は怠られる傾向があつたり、研究への自発的意欲、執念がうすいよう、また、かつてのような特長ある学生が余りみられず、何か型にはまつてスケールが小さくなつた感じがする。女子の多いのが、近年この種の学校の共通な特長で、われわれのところも

七割、あるいは少なくとも六割は女子である。しかし私は女子学生亡国論者ではない。女子の進学は大変結構であり、とりわけ社会福祉の分野では女子に適した仕事も多く、また教養としても社会福祉の勉強は大変有意義だと思っている。たとえ彼女たちが学んだことを仕事において直接生かさなかったとしても、やがて彼女たちが社会の中堅どころの主婦となった場合、地域社会における社会福祉のよき理解者として活躍する機会がきつとあるからである。社会福祉の前進には、こうした一般社会への社会福祉の理解の浸透が第一の条件であることを考えると、これも大いに意義のあることと考えなければならぬ。

*

就職については、多くの場合女子よりは長続きのする男子が歓迎されることが多い。女子学生の方でも就職を全然考えない人も多く、希望者であっても、自分の思う条件にかなったところ、もしいいところでもあれば、というような人が多い。是が非でも仕事にかなければならない男子におけるような切実さが少ない。本人が社会福祉の仕事に進みたくても親の賛成が得られないという場合もあ

ったりする。次に現代学生のこの問題にかんする幾つかのプロフィールを描いてみよう。

A嬢——「申込もうと思つたら期日は昨日までだったんです。学生部で相談すると成績もいいし向うへ直接交渉して受験させてもらうようにしたらといわれたのですが、私は是非そこに勤めてみたいのですが……」私はその長あてに、彼女が如何にそこを希望しているか、受験の機会さえあたえてもらつたらこの上もない喜びだということを書き送つた。数日後、やがて来た彼女、「行つてみると余りパツとしないところだったし、受験してよということになつてみると、かえつて気が進まなくなつてしまつて……」と元気がない。勇気づけられて気をとり直した彼女、見事合格、就職して数カ月して、「外まわりばかりしていますので真黒になつてしまいました」という手紙をくれる。元気にやっているなあ——と私は安堵し、満足である。お嬢さんは気まぐれだと思ひながらも……。

B嬢——クリスチャン一家に育つファイトのある女性、親たちはもともと娘の就職には不賛成であった。彼女は何か月かかかつて両親を説き伏せ、児童施設で働らく承諾を勝ち

とつた。学んだことを生かし、社会へ貢献したいという彼女の熱意に両親は動かされ、反対の立場から積極的な賛成、協力へと全く逆の態度変更に向つたのである。私はいろいろな情報を集めた結果、すぐれた施設として評判の高いあるところへ彼女の就職を斡旋した。しかし外の評判に反して内部は余りにも違つていた。彼女の児童福祉への熱意と知識、技術はその施設のどうにもならない旧体制にはばまれ、どうにも生かしようがないのである。

「この通りの毎日なら、自分が働らいても無駄なような気がする」という。彼女の悩みは深刻である。社会福祉施設は、ところによつてはその建物、設備については昔と比較にならないぐらい美しく立派になった。しかし中味はほとんど變つていないのである。團長以下すべての職員が、收容児童の福祉のために一致協力の合理的能率的な体制ができあがっている——そんな施設はまだまだ遠い理想とていうのが日本の現実である。彼女は今の今も、自分の信念の実現に向つて苦闘中である。

C君——時に二日間の徹夜マーチャンをや、深夜の土方アルバイトもして、学校へは

余り出席しなかつたツフガイ。しかし精神薄弱者問題には熱心で、そのテーマにかんする卒業論文には、精神弱者に対する熱意があふれていた。精神薄弱者援護施設に就職した彼、学生時代きわめて口下手だった彼、見学に来た大勢の後輩学生の前で、しんのある一席をぶつことができるようになり、収容者から慕われ、團長からほめられ、大いに気をよくしていたところ、就職後一年数カ月にして突如そこを止めてしまった。もつと広い世界が彼を呼び、彼は行くあてもなく自分を試すたのに出て行ったとのことである。二カ月ほどして突如私のところへやってくる。「あれから大阪へ出てやがて京都へもどり、車をひいてラーメン屋をやっていた。一杯売ると三十円一日千円ぐらいになった。大阪で知りあつたある女性と結婚しようと思ひ、定職も必要なので、新聞の求人広告をたよつて大阪南のある運送会社へ行つたら、保証人がいるとのこと、本当にあつかましい限りだが、なつてもらえないか」といふ。現在住所不定、家へも何も知せていないし、今のところだまつていたいとのこと。仕事と住居とがきまれば私にはきつと知らせるといふ約束で彼に対する

二度目の保証人になることにしたが、やはりまだ何の沙汰もない。彼を最初に採用し世話してくれた施設の團長、彼に対しては私としては申訳けない気持ちだが、「若いときはそんな気持ちになるもんだよ……あいつは大したもんだよ。大物になるかも知れん」といふを彼むしろ祝福してくれるのである。沢山の女子学生にかこまれて、こんな侍も中にはいるのである。

D君——学生時代は児童施設サービスマン・グループのリーダーとして熱心な実践活動を続け、読みたい論文でもあれば執筆者に手紙を書いて送つてもらひ勉強する意欲ある学生。しかし彼はどういふことか生涯の仕事として社会事業を考えなかつた。幾つかの会社を彼は受けてみたが、その過程でやはりそれまでの自分を生かそうと考へなかつた。ということと彼は児童施設に入ったが、はりきつてやうっているらしく、時々かかつてくる電話はすこぶる元気がよい。相変らず研究熱心、社会事業に従事する卒業生の仲間たちでお金を出し合つて、目下研究機関紙を出す準備を進めている。(心ある人のカンパがあればと願っている)彼の両親は、彼が学校で学んだこと

を生かし、労若多き社会事業に進む息子を中心から喜んでゐる。すばらしい親たちではないか！

*

こんにち社会事業の世界において真に必要なのは、すぐれた人物、真のソーシャル・ワーカーである。マス・プロ教育の嵐の中で、ゆたかで安楽な生活が一般化すればするほどかえつてますます労若多き仕事となり、特別な熱意ないし決意を要求する社会事業に、挺身する若人——三人であれば四人に、四人を五人にとりふうにしていくこと、これがわれわれの願ひであり、任務でなければならぬ。伝統ある同志社の社会福祉に対する責任は大きい。しかし伝統に安住するのであつてはならない。そうなければ現在と未来は損なわれ、伝統そのものも死滅させてしまふことにならう。現在の絶え間のない努力の中に伝統は生かされるものでなければならぬ。そして、二十一世紀に生きる伝統はわれわれのこの現在にかかつてゐるのである。

(文学部教授・社会調査)

肢体不自由児と

学生ボランティア

福 富 敬 治
新 田 義 治

近年、わが国もボランティア活動が盛んになってきたが、欧米のそれと比べると隔世の感がある。北欧では結婚のきまつた娘さんは、挙式までの半年か一年の間、社会福祉関係の施設でボランティアサービスをする習慣がある。また地方公共団体の指定する社会福祉施設で一定期間ボランティアサービスをすると

きには、勤務先の会社は休暇扱いに法律で定められている国もあるということである。ボストンの病院のボランティア部は、初老の婦人が部長で、その病院でサービシしてくれる各ボランティアの登録表がロッカーにぎっしりとつまっていて、ボランティアの希望者に

は、この部長が一人一人面接、テストをして採用している。別にブラックリストもあって、平常のサービシ内容や、出欠がきちんとして、記録され、欠席の多い人や、熱心でない人はボランティアサービシを断わっている。わが国でこれほどきびしくしたら、どうであろうか。

ボランティアは、中途半端な善意の押売りではない。無料奉仕ということでもない。また有給職員の代用をするものでもない。市民の善意と社会連帯感による自発的意志により、教育、訓練をうけて、計画され組織化された方針によって活動するものである。さらにその活動は、ボランティアの自己満足に終始するものでもなく、サービシ対象の欲

求に適合したものでなければならぬ。ボランティアの集まりがクラブ的な段階からさらに前進して、地域社会に結びついたとき、いっそう意味のあるボランティア活動となるのである。だから、さきにあげたボストンの病院の例はしごく当然なのだが、わが国では抵抗なしにうけ入れられるであろうか。「ただで、わざわざ自分の時間をさいて、奉仕して下さるのだから」とかなりルーズさも認められ、珍らしがられ、美談にされがちである。

これではいつまでたっても、ただの善意の集まりでしかないし、長続きしないのである。

民主社会においては、隣人愛の精神がつけいほどボランティア活動が盛んである。最大公約数の政府の仕事を税金で一方で支えながらも、身近かにいる隣人の特殊な欲求については、具体的、行動的に解決していくことが必要なのである。別のいい方をすれば、行政という幹線道路も必要だが、ボランティアという細かい路地もなければ人間の社会生活ができないのである。この二つは役割を異にするものなのである。行政を刺戟しやがては公機関にうけついでいく開拓的な、仕事をボランティアがすることもある。わが国において

はボランテニア活動が盛んであるのに、行政が傍観していることに問題がある。ボランテニア活動が地域社会を開眼させ、社会的な運動となって行政をより充実させることが、市民一人一人の責任でもあり、ボランテニア活動の責任でもあるのである。

二

これからのべようとする「京都肢体不自由児サービスクループ」はわが国のボランテニア活動としてユニークな歩みをしてきたといえる。このグループ（通称GSという）がサービス対象にしている肢体不自由児に一寸ふれておこう。「手足および体幹の機能に自由なところがあって、そのままでは生業を営む上に支障のある児童を肢体不自由児という」と定義されている。その原因は多種多様であるが、現在問題の焦点になっているのが、脳性小児麻痺（cerebral palsy、略してC・P）である。C・Pというのは、脳の運動中枢が何らかの原因で損傷しておくもので、四肢の運動機能の麻痺である。いくつかの型があるが、手足がつっぱり、思うように動かなかつたり、当人の意志にかかわらず不随意に身

体がうごくものや身体バランスがとれないなどであるが、脳の損傷に起因するのでいくつかの合併症がある。C・P児の七、八割が言語障害をもっている。呼吸作用がうまく行なわれないためと、発声機能に障害があり、聴力障害があるためにおこるが、女の先生の声がよく聞えず、男の先生にかわつたら成績があがったという例もある。この言語障害にたいする対策が大へん遅れている。次に多いのが知能障害で、C・P児の半数くらいがもつといわれているが、身体が不自由なために経験不足などからくる発達のおくれもあるし、意志の表現能力がないために精神薄弱とあやまられる場合もある。視力障害もかなり多くて、斜視、近視がある。次に癩れん発作をもつものが二割くらいある。乳幼児期に呼吸および、のどの筋肉の未発達のために、食事をかむことと、のみこむことができず、十才になっても牛乳、それも特定のメーカーのものしか飲まない男児がいたり、小学校三年になるまで、母親が固形物をかみくだいて与えているうちに死亡した、という例もある。

C・Pに対する治療は、正常児の運動発達にしたがった訓練をするほかない。手足の矯正に手術をすることもあるが、補装具を付たりしての機能訓練が主である。

C・Pになる原因であるが、(一)、妊婦、ことに初期に母体が流感などのウイルス性疾患にかかり、それが胎児に影響をおよぼした場合、妊娠中毒症、ビタミン欠乏症、血液型不適合で出生後重症黄疸になるなどによるもの、(二)、難産で仮死状態になり酸素欠乏とか、早産による未熟児など、C・P児の六割が出産時に原因している。(三)、生後の高熱の出る病氣、脳炎、頭部の外傷によるなど、によつても起るがこの場合、原因が明らかであるので、脳炎後遺症といつてC・Pに入れないう学者もある。

C・Pはまだ研究不足で、よくわかっていないし、脳に起因することから、治療が困難で、結局C・Pを生まないように、妊娠中から母体の健康に留意することが肝要である。

C・Pの他に昭和三十六年に大流行し、それがワクチン服用へと予防対策がすすんだ伝染病の「ポリオ（脊髄性小児麻痺）」がある。ポリオウイルスの感染によつて風邪のごとき高熱が続き、熱がひいたあとに、筋肉がだらりと麻痺してしまふ。しかしワクチンの服用

が法的にきめられて以来、激減し、ほとんど発生をみていない。三十六年以前に発生したものの対策がのこっている。

結核性疾患として、骨関節の結核、脊椎カ

宮津市での日本海キャンプ



リエスなど十年前は多かったが、結核対策と共に減少し、今日は大へん少ない。

近代医学の進歩と生活様式の変化によって肢体不自由児も、予防や治療ができ、結局のこってくるのが、C・Pであり、その他いくつかの特殊な疾患である。重症心身障害児施設が児童福祉法の改正で加えられたが、重度の精神薄弱（普通、知能指数が三十五以下とされている）と重度の肢体不自由児を併せもつものが重症心身障害児といわれるが、その大部分がC・Pである。十才になっても寝たまま、体重は重くなり、母親の手に負えず、重度C・P児の母親の多くは、心臓を悪くしている。C・P児を放置することは、一人の人間の問題のみでなく、家族の問題でもあるし、貴い人間の生命を無視することでもあり、社会としても大きな損失である。私はこの子らを見ると、文明のすすんだ今日でも、なおこれらの十分な対策のない児童をみると、大いに怒りを感じる。新島先生は、亡くなられる直前の手紙に、「貴君、敗戦の皮迄も決して捨て賜う勿れ」と書かれた。社会福祉事業、ことに肢体不自由児対策における真髓を端的に表現した言葉である。

三

京都で肢体不自由児に対するボランティア活動は、昭和三十年に開始された。この年の春、京都YMCAは「肢体不自由児療育キャンプ」をびわ湖畔の京都YMCA佐波江キャンプ場で実施することを検討していた。特殊キャンプで困難性があり、反対意見もあったが、当時あまりかえりみられなかった不自由児には、療育キャンプが有効であることから、YMCAの社会奉仕活動として、開拓の事業としてとりあげることになった。少年部担当の山下政一主事（昭和二十八年社会学科卒、現富山YMCA総主事）が企画および実施の責任者となり、酒井美智男副総主事（昭和六年神学部卒、現総主事）など、YMCAが総力をあげて準備をすすめた。山下主事はボランティアの養成について同志社大学社会学科の伊藤規矩治教授に助力を求め、伊藤教授はさらに、京都市や毎日新聞など各方面に働きかけ、物質的、精神的協力を集めた。ボランティアとしてのキャンプリーダーの募集は社会学科の大塚遼雄教授（現京都肢体不自由児協会会長）が社会福祉学専攻の学生を中

心に募集し、福富敬治ら同志社大学の学生十
一名、他一名が参加することになった。彼ら
は肢体不自由児に関しては全く未知の者はか
りであった。キャンプリーダーの訓練がまず
なされ、毎土曜日の午後Y.M.C.A.での研究会
は次の方向から行なわれた。

1、ボランテア運動として実施すること。
2、組織キャンプとしての訓練を行なうこ
と。

3、肢体不自由児に関する医学的知識を修得
し、個々の肢体不自由児については、身体
検査、心理テスト、家庭訪問などにより十
分にケーススタディをなし、ソーシアルケ
ースワークの方法によること。

であった。この三点は、以後受けつがれ今日
もなお守られている。

参加の不自由児は、国立京都病院内にある
肢体不自由児療育病室と同整形外科の協力を
えて集められた。第一回キャンプは、三泊四
日であったが、過保護の傾向がつよく療育キ
ャンプには遠かった。けれども参加児は生れ
て初めての経験に喜び、リーダーも、またサ
ービスをする意識を感じ、不自由児について
の理解と愛情をもち始めた。第三回までは、

キャンプのみが活動内容であった。ボランテ
アも友人から友人に勧誘する方法、いわゆ
るマジックチェーンによる加入方法、がとら
れ、一泊研修会でチームワークづくりをした。
肢体不自由児の保護者からは、風邪をひかな
くなった、偏食がなくなった、積極性が出た
など、キャンプ効果を聞かされた。これらは
キャンプのみでなく年間を通してのサービス
活動をやれば、いっそうよい結果があること
は理論的にはわかっていたが、すぐには実施
できなかった。これが、第四回キャンプ後に
実を結び、年間を通してのサービスも組織的
にやることが、リーダーたちの自然の声とな
って、昭和三十三年十月、「京都Y.M.C.A.肢
体不自由児サービスグループ」を結成し、新
田義治が初代委員長となった。通称をGSと
いうのもこの夏からである。いろいろやりた
いことがあっても、経済的にも、技術的にも、
社会の対策の不備などからも、皆が欲求不満
となり、サービスの対象は肢体不自由児、わ
れらはシタイコト不自由児といつては不満を
まぎらしていた。ボランテアがいくら開拓
的活動をやっても、それを支えてくれる関係
機関の整備や世論がないことには、どうにも

ならないのである。そこで行政がやらなけれ
ば、われわれがやろう。御節介でもよい。だ
がやるからには充実した偉大なものにした
という願いから、出てきたのがグレート・オ
セカイ (Great O Seikai) のGSであつ
た。Great service の意も含めて、以来愛称と
なった。この年はピクニックをやり、十二月
にクリスマス祝会をY.M.C.A.会館で開催し
た。その日は雨であったが、定刻二時間前か
らやってくる児童もあり、欠席はなく、そし
て定刻一時間前には大半が集まり、三十分早
く開始しなければならなかった。われわれの
ささやかなクリスマスが、かくもこの子らに
期待されているのかと思うと、感激と責任の
大きさを痛感した。このクリスマス祝会はG
Sの恒例となり、盛大に行なわれるようにな
った。こういうニードが肢体不自由児のなか
にあることを知ったGSは、ここでボランテ
アとして自分たちの仕事を見出したのであ
る。

組織ができ、年間を通してのサービスが行
なわれることは、対象も広がってくる、参加
児も多くなり年々増加した。

ボランテアも同志社大学が常に大多数を

しめ、他の大学の社会福祉専攻生が少数参加していた。このボランティア活動を市内の各方面が知ることになり、昭和三十六年頃から、京都市内の各大学からの参加者が増加してきた。研究会もGS結成から毎水曜日の夜となり、京都YMCAも、少年部担当主事がGSの世話をすることになった。

昭和三十七年十一月、東京で開催された、第一回全国肢体不自由児福祉大会でGSは団体として表彰された。被表彰者は肢体不自由児事業の永年勤続者が大部分であったが、学生ボランティアはGSだけであった。

そして昭和三十八年秋には、京都新聞四大賞として、この年初めて設けられた社会賞をGSがもらった。GSの卒業生たちからは、米国に留学、視察に出かけた者も十指に余る。そして卒業後肢体不自由児関係の職場につきもの、社会福祉関係に従事するものが多くなってきた。

昭和三十三年秋、京都市立呉竹養護学校が開設された。肢体不自由児のための学校であった。GSの活動が間接的に開校を早めることになったと聞いている。また昭和三十五年に京都肢体不自由児協会が正式に発足したがそ

の発足当時の役員会に、このキャンプ事業委員会の委員が参画している。

昭和四十一年四月、京都肢体不自由児協会が現在の京都YMCA会館地階に移転して、GSもYMCAから離れ独立した。そして四十二年度からは、京都肢体不自由児協会の傘下に入った。GSと協会は、肢体不自由児の福祉をすすめる共通の目的をもち共に協力することにしたのである。

現在のGS会員は五十九名で、同志社大学、同志社女子大学、その他十三の大学から参加しており、専攻も各学部にわたっている。前年まで、全員が同じ日に研究会を開いていたが、仕事の内容もわかれてきたので、次のように分割して行なうようになった。

1、キャンプなど特別プログラム担当班
夏の療育キャンプを中心になって研究、準備し、春秋のピクニック、クリスマス祝会

などの大行事を担当する。研究会は毎水曜日夜。

2、グループ担当班

キャンプ後の昭和三十六年に中学生のグループとして「ジンガーグループ」がつけられた。高校生および同年令児のグループの

「泉グループ」が昭和三十八年に結成され、それぞれ、毎月一回例会を開いている。グループワークの技術を用いて、GSはグループリーダーとして、小集団による指導をし、肢体不自由児の成長をはかっている。研究会は毎水曜日夜。

3、フレンドリービジター班

昭和四十一年秋から開始した新事業である。従来GSはそのボランティアとしての性格上比較的軽症児を対象としていたが、重症児を対象として家庭にいる重度のCP児の居宅療育をすすめるために、他県ではホームヘルパーという名称であるが、GSの場合、個別的に友愛的に訪問し、遊び相手になり、学習指導などをすることをねらいとしている。研究会は毎水曜日夜。

四

GSという学生ボランティアが十三年間の歴史をもち充実したサービズ活動をし、京都の肢体不自由児関係者から、深い信頼感をもたれていることについて考えてみよう。

ボランティア活動に欠かせないものが、二つある、その第一は、ボランティアの集合所

である。京都YMCA会館という交通に便利な場所があったことである。これは大へん重要な要素であった。そこに行けば誰かがいて、何かをやっているということ、これはボランティア活動の必須要件である。

第二には、よき指導者（スーパーバイザー）である。GSには大塚達雄教授他同志社大学関係のよき指導者がいたこと、これも欠かせない条件である。自らもボランティアとしての努力でスーパービジョンをすることにより、彼らの活動はみがかけられるのである。従って昭和三十一年からの大塚教授のたえざる指導の力は偉大であった。

次にGSの方針であるが、
1、No work without studyに徹したこと。
対象の肢体不自由児と、サービスのやり方、技術について、社会事業の技術を常に勉強したことである。毎週一回の研究會、臨時の會合など学生にはかなりの重荷である。そして行事たびにレポートの提出を要求されることは、中途半端な心構えでは長続きしない。
2、サービスに終始したこと。最初、同志社大学社会福祉学専攻の実習コースという意見もあったが、それは断わった。実習コース

になれば、ボランティアサービスにならず、逆に実習のために参加する者もでてくるからである。卒業論文をかくために参加した者もない。だからあくまでも不自由児優先である。純粹に対象者中心主義でサービスに徹したこと、これは専門知識の吸収ともなるが、専門家に近いボランティアを旨ざしたことは成功への因であった。

3、ボランティア精神に徹したこと、無報酬の奉仕だけではない。開拓者精神がみちていたし、はでな行事よりも、じみに地域社会に結びついた、肢体不自由児の要求に応じた狭いが深いサービスをしたこと、黙々とした努力がボランティアに必要ではなからうか。昨年初の「暮しの手帖」で松田道雄先生からGSが大へんおほめの言葉をもらったのも、これらのことからではなからうか。

だが、地域社会の協力も大きかった。第一回の四十三名、五万七千円の寄付が、十年余の昨年は五百名をこえる、九十九万円の寄付が集まった。仕事の内容もボランティアとしてふえたが、この方々の暖かいご援助がGSを育てたともいえる。毎年の報告書はその人々の愛情が満ちているのである。

昭和四十二年のキャンプではNHKテレビを通して二度放送された。一つは宮津市での京都府下の肢体不自由児の第六回日本海キャンプ。一つは京都市内の肢体不自由児のびわ湖での第十三回キャンプである。

自分たちのキャンプが放送されることによつて、日本の社会に肢体不自由児の問題をつたえることを願っているGSの会員たちには、初期の困苦に満ちた先輩たちテレビ放送がきまったことを知らせるためにハガキを書いた。寄付をして下さった多くの人にも。肢体不自由児の幸福を祈りながら。GSは不自由をのりこえる一人のよき市民にこの子らを育て、敗鼓の皮を生かす努力をこれからもしていくことであらう。

福富 敬治（昭34大社卒、京都肢体不自由児協会常務理事）
新田 義治（昭36大社卒、女子大学職員）

考古学展示会

日時 10月27日―31日 10時―16時
場所 同志社大学新町校舎 臨光館
同志社大学考古学研究室

一世と二世とについての感想



内 田 淑 子

(訳・森 克 子)

今年の四月に空路日本へ参りました時は、嬉しさと悲しさと不安とが入りまじった気持ちで一杯でした。と申しますのはその六カ月前に母を亡くし、八十二才の老父を伴っておりまして、多分これが父にとっては最後の母国訪問になるだろうと思つたからでした。

父は脳血栓のため、この六年ほどの間、体が少しマヒしておりましたが、もう一度京都を訪れて友人や親類の者に会い、また變する母校同志社を訪問することを願つておりました。この希望があつたからこそ、父はくじけずに長く苦しい闘病生活に打ち勝つことができたのでした。

私たちの飛行機には永く合衆国に住み、四、五十年も前に出た故国を今はじめ、または何度目かに訪問しようとしている一世の人たちがたくさん乗つておりました。その人たちはほとんど皆白髪で七、八十歳台でした。それは合衆国在住の一世の平均年齢です。永年畑や庭で働らいて来たため、皆の顔は日にやりました。

大抵の一世の人たちは、わずか十年か十五年ほど前からやと生活が楽になったのです。今ではその二世の息子や娘たちが成人しております。この二世たちは各々仕事をもち、

その地域では押しも押されぬ、信用ある社会人になっております。彼らは医師、法律家、教師、看護婦、実業家として成功しております。彼らは一世である両親たちが得ることのできなかった地位を得ており、また経済的にも両親を助けることができるようになっております。ですから今では一世の人たちは老後を気楽に暮らすことができるのです。

一世の人たちが合衆国で過して来た今までの生活は決して楽なものではなかったのですから、今どんなに安楽で楽しい生活を与えられてもそれは受けるに値するものです。彼らの多くの人たちが合衆国に渡つた一九〇〇年代のはじめは、異国での淋しく苦しい時代でした。彼らは社会的にも経済的にも、法的にさえも差別されていまして、土地を手に入れることも市民権を得ることもできませんでした。それにもかかわらず、彼らは自立し、子供たちのために家庭を築こうと苦闘いたしました。彼らは一週間中一日も休まずに働らき続け、大きな犠牲を払つても子供たちを専門学校や大学に通わせ、合衆国の良い市民になるように教育しました。こうした一世の人たちの努力のおかげで、今日では二世は、合

衆国の中で最も教育程度が高く、法に忠実で、最も勤勉な少数グループになっております。

多くの二世たちはその両親たちから日本人の性格や物の考え方を学びとっており、それが第二次世界大戦の時にはつきりあらわれたと思います。

*

戦争が始まると合衆国の一世たちはすぐに敵国人となり、二世たちも市民権を持っていたにもかかわらず疑いの目でみられました。一九四二年の五月には戦時のヒステリーの気運と軍事上、経済上の圧力のために十一万人の日本人が大統領の命令で強制的に西海岸から撤退させられました。職からも家からも追われて、敵国人も市民権をもつ日本人も皆一緒に人里離れた内陸の抑留キャンプへ送られ、陸軍のタールペーパー造りのバラックに入れられました。合衆国の陸軍が二世の男子に志願兵として軍隊に加わるように求めて来たのは鉄条網で囲まれ武装した軍隊に見張られていたこの抑留キャンプでだったのです。しかし志願することは二世たちの合衆国に対する忠誠を証明する一つの方法でしたし、またその事が二世の未来を左右することにもな



ると米国の当局者は申しました。

このような不公平な命令に反対する一世もありました。「お前たちの背後に鉄条網を張るような国のためになぜ戦うのか。」と尋ねました。しかし他の一世はこのむづかしい結論は息子たちが自分で出さねばならないものであることをわきまえて、何も言わないでい

ました。彼らはその子供たちに忠実なアメリカ市民になるよう教育して来たのであり、子供たちはその教えを守ろうとしていたのでした。志願兵は多数にのぼり、後日有名になった四四二および一〇〇歩兵大隊を組織し、その勇敢な働らきは合衆国の人々の心をとりえ、信頼をかちとり、日系アメリカ人に対す

る差別をなくすのに大きな力となりました。
 抑留キャンプの二世の間には険悪な気分はほとんどありませんでした。それは多分、一世である彼らの両親が、第二次大戦が終るまでは、彼らを全面的に受け入れようとしなかった国に対しても、苦しい思いを抱かなかつたからであろうと思います。

*

一世である私の両親は武士の子供でした。彼らは明治時代に生れ、一九〇〇年代の初期に日本を去りましたから、古い時代の日本の心や考え方や習慣をそのまま身につけておりました。彼らは質素で簡素な生活をしておりました。彼らは良心的に働らき、忍耐強く辛抱強く、子供たちには献身的で、自分の母校に対しては非常に忠実で、先生には深い尊敬を抱いてをりました。母は七十三歳で亡くなるまで同志社の昔の先生の一人と文通しておりました。

合衆国在住の多くの一世は私の両親と同様で、また熱心なキリスト教徒です。彼らはしっかりしていて、良識があります。彼らは合衆国にたくさんさんの教会をたて、最近になって二世がそれを受けつぐようになるまで、多額

の経済援助を続けて来ました。彼らの信仰は二世の信仰よりしっかりしているようです。母が亡くなった時、私や私の姉を慰め、強い信仰で私たちを勇気づけてくれたのは年老いた私の父でありました。

私たち二世は一世である両親からまだ多くのものを学ばねばなりませんし、考え方も言語も行為も全くアメリカ人になり切っている三世たちにはなおさらのことです。日本の青年たちも同様だと思います。自由と西欧文化の物質面ばかりを追うのでなく、「見時代おくれ」のようにみえる明治のおじいさん、おばあさんの思想や性格を大切にしていきたいと思います。「武士道精神」の中に受けつがれている性格の強靱さには尊厳と品位があり、それは大切にされるべきものだと思います。合衆国の二世および三世たちがその両親である一世たちの残したすぐれたものと大切にするように願うと共に、日本の青年たちも古い時代の日本の精神的価値を失わず、また余り急速に西欧文明を受け入れようとするあまり、日本独自の非常にすぐれた文化を見失わないでほしいと切望します。

(社友・内田莞氏二女、童話作家)

同 志 社 時 報 第 26 号

読 物	新島襄の思想原理……………西 田 毅
	現実から浮上っている女子学生と福音……………杉 瀬 祐
	学校礼拝の在り方……………河 崎 洋 子
え と 文	「富士」……………辻 本 敬 三
	カウンセラーの目……………野 辺 地 正 之
学生時代	グリークラブの創設……………片 桐 哲

随想・私の研究・人物誌その他
 一部100円 年6回発行